143
6
72

紀世流
別能古八番之內

宝君
碇潜
身更
枕慈童
飛雲

貳

東京圖書館

和書門	音樂遊藝類	一四〇函	五五架	一六號	六冊

室君

宇治

是ハ播州室の明神に仕へ申神職
其者なりし梅を天下泰平の折
節なれバ室君達を舟に乃紛ぢや
しゆとして神前にまゐる所神事
乃行ぐ此時を目出度代なれバ急
所神事をとりをこなはせやと

ねがひつふかある。「御前みや道
き室君達よ神前にまゐりつゝ
「舞ひて「宝の舞ひ袖を長閑
冬きいまの夜半の月にさらさ
ほうらく辰の雪やおく
「梅が香の梢山もみち
霞や霞ぞ春もひもそつかへる
花ぞ花ほおくかける「弓須白妙
れかくも又とくよきに程とれさ
かたよげの舞とぞらく「声の
舞う御代の一段ぞ夕波子
鳥声をてあらひろのあまし女
ぞるてまさる宝をば行舟や志
まるあさりまつのともやらへ

そもしおあつまりこまもしやばなをも寿
うつりて京しい人よあつきの海を
なるうぬやあちこちのやう舟はきぬ
君寿ところはんみなおもしろきのの寿
うらんきりわもわきくわいき
人をまとつ橋とぞ何山姫乃神さうす
らんきりの山のみせんとうまつく日影を

かうぬ天地はひきしとりある
もさりのまつてやまおかこりや絃へ
あまくこ夏さけてかもちてよごとや
ねば雨乃雲の雪りて籠白おみぬるを
はてるまき雨乃雪のかさくとぞ志
るやまつりのきみたちて豊年
月のあかばえも留も きみの寿うれ

ていさや遊さん いつかいつかの白
出る拍節よてては神楽を舞ふ
きこえけへ さらば神楽をとりかへ
せうもるあし 宮とても室山
隠の神垣の 松蔭の宮井は石
経や月のくず 行まに
風あさまきばぬ きやいきやうえ

しかも和光の垂迹菩提薩埵まへ
の姿を現し給ふ まのあたり 示の
うへさる経緩の波風よ さか
まく潮のまし 首の宮の海お
まくや山はのぼりて上求菩提
のきをまもる 海をくだりて
下化衆生の おとあらうおもて

乃名ハ宮ヨ山海乃大海とる門
て花ぬり美香くんしつゝ相好ま
とに所よめいしがんるい袖をう
ほほ瓶をぐや明行や雲乃長れぞ
や明くし乃宮ゑりてごくうに
あらう瓶をひまり

第 碇潜

雲を志るへ乃入前よんでぐ月の
行湯を尋ん 半行 是ハ都方よりむる
僧にて梅を平家乃一門ハ長門乃
浦にて果給ひて我をも平家のゆ
里の者にて狂ぶ門乃跡を弔ひや
さんと思ひ居ひ今長門乃國へと志ひ

本より也浮世乃様に又出てゞく
宿けるめなく捨まる才乃行まゝなる
まゝそこと也波に落る塩の塩
ちやとも乃浦に蒸にきりく 兼
程にぞやとも乃浦に蒸て皆母を
お待便船をまゝ也なり いかに
あさ乃出らきこそ人ハ鈍なきの具体

に沖も磯邊も波ハ有し鈍なるとま
もなくやうく出らぐき世乃まさ我
意とよ 磯子鳥友よひかゝる声
まゝ海士乃子ハ心物よ 有しく
あまゝなる舟に便船ゆきに 中く
乃刀百まゝ仮へ掛舟袈ハ 元々
出家の刀なりしへハ母袈ハりしへハ

門司前問や彼問も乃ぢやとしと云て
おそうしき事を 舟渓なりて渡らせ
とは王道にある僧達なり 不思議の
なるゆゆゆゆ 王縁乃僧に舟渓をぞ
らんと思ふそなたこそ王道にとは
云へきれ 宮ニ 是ハ法理ゆゆ 梅ハ
まうけなるはいかなれなる有ゆん 是ハ

一宗の典なりどもこゝあらハ續誦をん
梅ハ嬉しや法僧乃續誦を我なり舟渓
なるく 今汎舟に法乃ゆゆ いさ聽
ゆゆをん法花経乃ぞし 関の戸あ
ゆゆ勢やうりゆ 妙法蓮華経茶
王菩薩品如子得母如渡得船 二ハ
渡りに舟を得たりとやあらたりとや

上言

汁法とくく石まんへゥくといふや
解かひをうけ乃母ぶ人乃法にそ
能永奥と見へ入ぶりぶりやあらけの
ぢうひ乃永に法乃人他生乃縁ハ有
うさやく いうふせう反先く永に
里法ありしへ中へき事乃法心ひも
何とゆえ以合ぬ中乃ならく作へ丸

いにしへ汁所ならくのいさ物語家
安き事乃事語けて皮を中へ
物語 梅を汁里友乃浦の合戦ごこハかうよと
見へし時門脇反乃決男能光守教
経小船に乗れり犬なきなしてし
てもうしこをなきなしにそ兵
なほくなろひにくり兵時新中納

使者をこそ給なき祖光殿の振
迫られけれはとてよき歌にてもあ
らはこそとしめされきれは拙は汎詞
ぞ犬特とくめとしは事なくや有
らんとらく歌の事にまきれしり
九郎判官を君にまゐらせ上記いかゝ思ひ
きん判官の事にまうけれ

能光殿より御ひとりて上記判
官是を見てうやうくがりしとや思
きん長刀協にうひきさんて二丈を
うりの味方の事にゆうりとこひ
乃きは教經はせんかたもなく長刀
おけまらくあと見をくりていうり
とりしてそうけうり

きる所ばくや安藝乃太郎同ま
次郎や兄弟二そうの舟をおしよせ
能光寺とそこうひきる相とし
おのまつよ。太刀を刀をいるまし
やいさやめいとれ供につまんと左
れかいあをけしおがまくをけん
て引よ飛てたたりれ脇にたえ

てあこ乃座にまつこきり 栂社
人々若粥灵そとい白波のあと
さひてあひのへおきに跡さひく
こひのへ 栂をこれ君を志川の成
折節に沂海きは乃ほとりふく
平家乃給を吊ぬ所に不思議の所
こ近いなりし大なうひ出て

さもさもやとも乃海なまた流まり
やらはさきもまはゞ濱湯乃江のか
とりなら狐と志うせん乃うらにて
こんとる秘曲松風にも出ぬなる
にて更にまきまぬ琴乃つゞ者
蓋ぬしきの事ゆゑ いかに大納言
乃ほほのごこ宵ハ波を舞なまは

月を詠覚あらんとの法事なりあ
れ若これと戸勢梶枝ぎめらくは
月を雲風乃ゥぐ咲をよしなや笞
とりて夜舟に月を海にしよ
まゝ月を視まる時にかんしやうに茅
命を出まハば乃逢りにつかさる舟
去ほとにこ乃浦に乃勢んべうハ和こ

さありし程ハ新中納言知盛二位殿
よまうひ宮子やうじハ思ひし作御
痛りあうら行幸を浪の底ぞしる
くまら坊が一門信ちやゐと浚
をおきえて宣へ大二位殿いきまう
ろ心ゆて作らそ出しくと立さ
まひへ今ハの出ちとおもしくて白き

袴のぼまたかく百を出ぢ十
を挟みさして宝けうそんて懐にさし
大納言のつかに内侍所いだいて
ら飛皇居にしまりあさまつらぶ
そうさんやへ心国とやみ遅尺
おほさ前しこへゝる波の底竜
宮とやて目出度都の御行幸

淀脊

さるほどにあくそうし給へ
も内侍おろかしと思しきるる
龍顔よはおそろしさうらへさ涙のうひて
東にむかはせおはしまし天照太神
に御いとま申させ給ひ其後西方に
て御十念をしおはしまして二位殿あはれ
こより玉躰をいだき目をふさき
て波乃底に入まゐらせらりし
いかしへのあと弔ひてたひ給へ
まへ　扨又修羅乃合戦の
ちまるるや　波のようつひさき
あれ行者そは修羅乃大将しげもりと
や釜をめくしよ如雨下如雨。宰相
三位殿乃養人々は門まつん一同成へそ

をつきあきはしらへ。又修羅曇
志んの乃おあるそや
修羅乃くうひちしまれぬ。源
氏乃軍兵其ゆゑひて彼は病舟
には目をうけた。たゞ兵船にそ
無る。平氏乃公達とをへにまゐり
平氏乃公達とをへに立流り矢さき
を揃。切さきをあらへてよ撓くる
うしきは侍うけたり。中にも知をり
まくそ出ら。大長刀をくさあるに
其の人たをあさてはたりをちくひ
ぞりくの歌をあろゆしきる。今は
思まらく志のまんとて。よ何ひ二位に
うふと二ちに。様を共才をおりく

十終

あさみとちるなる沖乃碇乃大網
えいやくと引よそ甲乃上に碇
をいたきかゝと乃上にいりをい
たきたく海底にとんてそ入に
きる

身延

凡方便現涅槃星霜二千二百餘迄
後五百歳中今かしに廣宣流布乃
時を御らんぜ妙法志ぬべう繁昌者日
目出度なる人きゝ時節ゝ邪　寂寞無人
色讀誦洪經典の窓の円一会三
千乃花薫し我今時爲現清

身延

浄ぎ明なる月の床乃上ゝ心三観君月
みたり花里の遊楽をしたゝに身延
山乃風水も讃誦の声添く自然の
霊地なりきと　松吹風を法君
こゑぐぢやいかゝ身ひたゝ
白や四方の梢宮秋かけて鄙邊乃
子種を様々よりきを受ける志ろ

ゆ乃どの姿を其まゝに紅葉り
をけいぐれ弄也ウ我を此身を此
まゝ成仏者法楚頼もしきウ初さい
身の母よあひゞく飢ゑ者の食を
そとめぐらうなる志乃衣をゐたる
おとくなり愛渡得船の海の面ざて
そ乃まゝ到るつゝいざほな車をいう

きへ所法にもとらるゝ御法にもとく
まゝ給ふ那 ワキ詞 我心願乃宮にしりひ
御経讀誦の折ふしとにがす一時も
おこたる事あらばまとよこゝ給さ
乃人とゆえたりぞもいたくよりき
たまれ人そ シテ詞 見なれ山遥林麓に
なれしもひまるなるかゞくに人乃

山可にぞりたるゝは上行菩薩の御姿
誕そとかゝるあれくてがれぬなる
所法にはおゝとかゝる女人者の今
御えられ法の場にいらくゝ悩さゝる
姿見に ワキ詞 宮に見ハ理りあるとぞ
こそ遥乃ふまとより時ゆるへぬ
所に御行を思へも不審なるに

ぶつ方なしけ世にあるにしたがへ妻かたり給ふ
ゆゑし（シテ内）早も心得給ひたりぼそれけし世
にあるさいあるかげりも有難きにしたへ去
ぶ法に値遇乃度うきわりてぞ苦患を
まぬかきしゆゑなるもやぬ賞せ為に主
あへ（コト）ぎぬ法蓮華経乃功徳の思儀
なるかぶ妣なるかぶ那ぶよく仏果をぶ

つきぬ（下ニ前同）たへなれ御法乃犯れえし
ぶ（ハル）さまらひそ（コト）なもまれに変成男子
我なりかぶ（ロ）芒覚れ跡とあひ龍女にれ
うくもとくしぶ（上ニ前）かにおとぬなるゆるを
ぶくらしくしぶ（ウ）古へ乃ぶ（ウ）ぶ志わしゆゑ
ぶらぬ悔若へ（ハル）子たひ悲しきに（ハル）ぶ（ハル）
ようこひ乃汗涙ぶれ（ハル）毛もよろこて

佛をつきかれ法にあらず事よ聖
人の御前に滂沱あらはしまる
宮や恩愛執乃淵ハ四大海より
かゝし閻法随在の其為にハ一滴を
おとしたとあり 皆経や宿罪必然
露恵日にあらず消て即身成佛
なり 御調達ハ五逆乃因にさしつゝ

まそかし阿鼻にくれしに経に法師
乃臺に宴ひ 況を持し讀誦せし
をや品一時を結縁をはぶれしを則
仏心なき 皈命妙法蓮華経一部
八巻四七品ぞのこしとく神力成志
めし乃へ経濁乱乃宿生なれば此経
なたもたりしにあらしくをたゞり

去ハ我則歓喜して諸仏も志るを
里と一家乃妙文ならぬ深宮虚
妄法堅受不可捨ゝ此ゝ
華厳乃法より般若より四十余
年未顕真実乃方便成仏乃まと
ならせまゝ妙法蓮華経ゝ正
直捨方便ゝ道ゝ知るべしゝ

有難やし経ゝ逢ゝ乃ゝ優曇花乃
花待ゝ嬉ゝ今ゝ乱ゝ也
おりゝ乃やゝ妙ゝ法の花ゝ袖
日やつまゝ回ゝ報謝ゝ舞
乃ゝて乃ゝ
地
雲雲ゝ
ゝ千種ゝ出ゝ
ゝ妙法蓮華ゝ

かなき法乃道ゆく　ぎくらくぬこ
そしれば　ゆくさ　園路をてくらく
ごけ乃きけなそ　おとく　得脱成
れ御法なりきこ　ばりかなや　頼をや
御法乃御声を　ばくらくぎて
よし日も入相乃　鐘ひきけ出ら
ぎにそ　ぬなれ法れ場ず死乃やま

乃ち勢れとと　水のふるをとのけら
諸法実相と　ゆきつ　草木國土皆
成仏の霊地なりきとく

七終

枕慈童

山より山の奥迄もく道ある時代なりきり 抑是ハ漢の皇帝乃臣下也。扨も汎祖南陽乃酈縣の山より。藥の水流き出。其水上をこて来ましと乃宣旨を蒙り。唯今山路に経き仍心なれ。山ゆつ迄

もたふとこそ。むかしなひくや
草恙ゆへをなくしてをこやうに分
つ行ハ程もなく尋ぬる山に恙り
きりく　是ハ其や酈縣の山につ
きくゆ。洪谷門の藥乃水にてくへし
ぬしに添くる上を尋ぬやとなほ
山迢邐として霜侵を紅樹水

栄辺として露潤ハ黄菊。ぬら面白
恙ありやなく　ふ思議なるに秋成
虎りの内を見ましいとうつしし紀
童子なる。そを御身ハいかなくそ
我ハ周の代に慈童といひし者也
扨又此身ハ行恙ためぬ洪深山にハ分
入給ふ　是ハ漢の皇帝の臣

下なれば藥の水の水上を見るよ也
の宣旨を蒙り来りたりまつく
似周代の八百年忠昔あるふ志り
を妙なる童子の姿ごいそもめ可成
事ゝ覺 我さへあやまりて御
枕を賦しよりの宴ふうつ[illegible]
とも我君御あさらぬ御恵ゝ枕

に妙文を志るしあして給ひぬ御れ
ハ我此のをもつて菊の柴に似妙
文我寫。流ようり[illegible]
水の[illegible]青命をのふ[illegible]
[illegible]神通を[illegible]
[illegible]
御枕祥を給へや人々よ これ[illegible]

かしきのみなりとおのく立より
御枕の妙文を拝しなるいてく
舞楽を奏しつゝ此まれ人の慰
めむと　西にむかひてうちまゐきを
ゆく。崑崙山に住居あれ。王母にか
しつく仙女の教へ楽器をてむかふ
きのさへて。雲に乗しく忽来り

ゆくをあまたかゝる仙楽を奏せば。慈
童は立出て。舞をうかつる姿も。
おもしろ面白や　本来薬の水あれ
ゆく。其身を替らば八百歳をすて
よみたりや。猶ことゝきはゆきりあ
しなく。此御薬をなんと。王君
をたいを立出て。薬のあをうつら

汲入勅使に是をたく事つ可ハ鄭
縣乃山路の菊の水ぐ見やむ山ハ色や
のむとも行きしかしめやむとへや乃
世とも面をぬ。よりひとのゝるめらく
たさよ

飛雲

第一

ま深く飛國を三熊野のく吉路や
旅の始有ぬ 是ハ本山三熊野の
山伏ならば我来羽黒山に来ら作
狩ぶ唯今羽黒に下向仕作 行来
を山伏のまゝり夜ゆく遥きぬる
旅をしそ思ひのまへもいく日数成夜

かさあるゝ麻衣木学れうゐたし谷深
かけ路の末を書かゝるゝ雲の八重山
いかたかりく　ヨキ詞　急ぎ程に見へたるや
木学路に見て候暫此所に休ふまる
みしゝ　一セイシテ　おまたゝ妻木乃道此者
しれやかさあれ考ゑ坂なるん　ヨキ詞　絶
まゝ苦しう候程に薪をおろし休ま

やと思ひ候　ヨキ　不思議なる是あるゝ
山縁を見まへ所うそ多きにかゝて紅
紫乃陰に休む氣色心なる影にて説
しう社へ　シテ　ちよりいやし此縁の男此
何乃心の久き　上セル　彼黒主う奇此心ハ薪
をおへ都山人ゑ花の木陰に休むを
しれをゆし直ゐる事の程我ゆ休

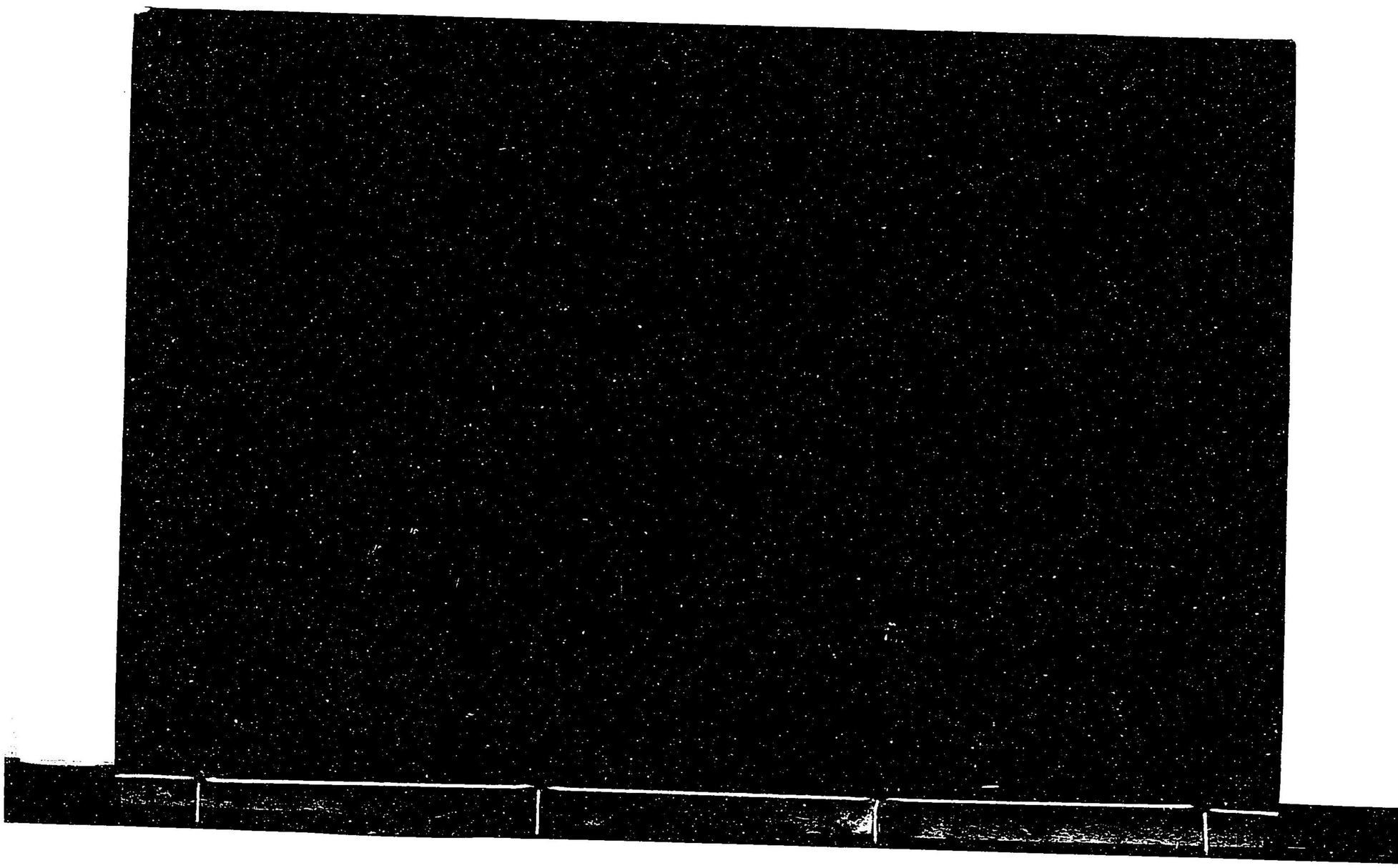
まだ紅葉の木陰いろゝ事にて作
あり（ワキ詞）夏人ある筈ぶ先々紅葉の名
所く所ある此方に多きまゝとも彼業
平乃心にまだ神代を吟ぜと云おさし
名にを新田のをみちの女（ワキせん）物語の
山ハ桂原ゟ木の名ふ色り紅出れ
村紅葉（シテ）又ハ塩の色のりみち紫

（ワキ）もゝかゝる雅（シテ）嵐山（上言同）女ゝ西方
に染あの秋の日ゝ（ウ）朔にを雲
と志るまゝ（ヤア）夕へにハ海とそゝ紅のもみ
を乃草木の子志に染を時ゝて（ヤラ）百
入子へに落紅ゝ手。梢の秋ハ面白や
（シテ）白露も（ヤア）時雨をいつくりる山ハ下
葉ゝ紅ゝ紅葉をかゝしく今宵山

伏の一夜を明し給ひ。我を為りて夜
もまた如ら夜好を。鉄の中さむと谷忠
戸深く入にきりく　荒然のしれき
しれ如ふ小夜も中よ夏方の　月新
くらき山中よ　行へき方をいらされ
は　あらふ成きる夏の告と　粉を鉄
て　残誦まれ　南意や開山役

優婆塞は三熊野三所権現力
を添へたひ給へ　姉しきや我をき
新石根よりく　黒雲一村發るやうへ
しう谷岸一同に鳴音き震動し盛
石をくつれ木が折る嵐よさ見せち
鬼やれ光りの中に那を出る鬼神
の姿面がむくき様をなさ　東方

に降三世明王 南方に軍吒利夜叉
明王 西方に大威德明王 小方に
金剛夜叉明王 中央に大日大臣
不動明王 唵呼嚕呼嚕旋茶利
摩登抳娑婆呵唵阿毘羅吽欠娑
婆呵 鬼神乃通力忽にぐ明王
乃けそくにかくれとゝへし如飛行をお

しておのれとまれた大地にたゝまふ
し起つまろひけおのれと身を責苦
志氣気に行者乃威力いよく增り
殊数さらくと押りんて 見我身
者發菩提心ぐ 閑我名者斷惡
修善聽我說者得大智惠智我身
者即身成佛即身成仏と行ふ勢

行者は遥に立のあれ不思議や今迄
ぐ大勢力は鬼神と見へしが立所に
弱りかして唱忘然と起上りてたゞ
よひ行と見へ居るが。なるつれ姿は雲
煙有ける姿也。雲煙と立清る。鬼
神のまゝに失にきり